

# 平成25年度沖縄群島病害虫発生予報第9号(12月予報)

## I 12月の気象予報

向こう1か月の平均気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	平均気温	降水量	日照時間
高い(多い)	60	30	30
平年並	30	30	40
低い(少ない)	10	40	30

(平成26年11月20日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
沖縄群島(那覇)	18.7	21.2	16.3	102.8	115.6

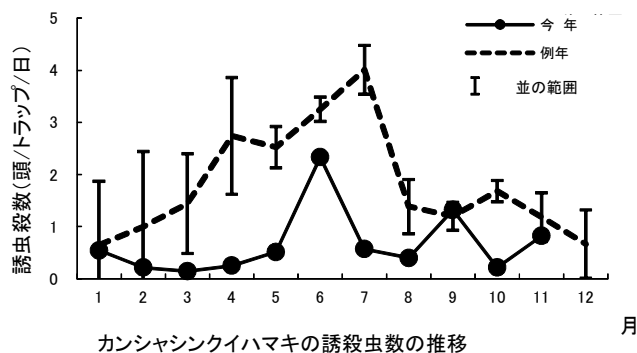
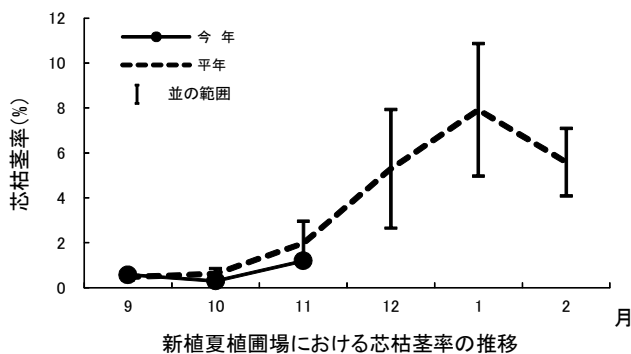
(沖縄気象台発表・統計期間1981~2010・資料年数30年)

## II 12月の発生予報および防除上の注意事項

### 1 さとうきび

#### ○ カンシャシクイハマキの防除対策

- a 11月中旬の調査の結果、新植夏植ほ場における芯枯茎率は1.2%(前年0.8%、平年1.9%)と平年並であった。
- b 11月のカンシャシクイハマキ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は0.8頭(前年1.0頭、例年1.2頭)と例年並であった。

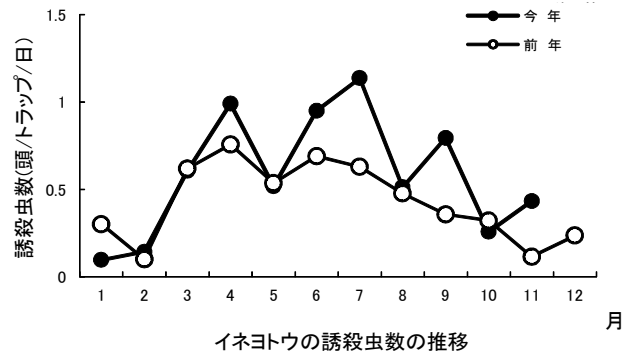
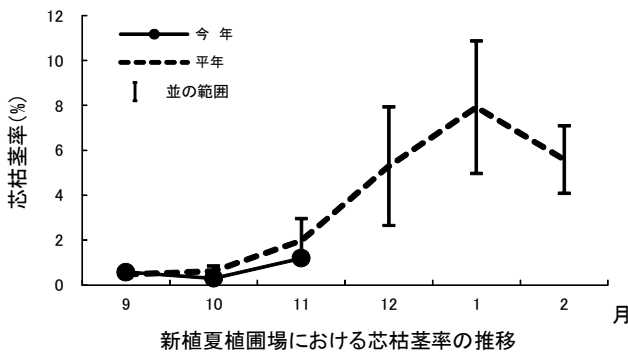


#### <防除上注意すべき事項>

- a ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- b 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、生育初期の防除を徹底する。
- c ほ場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- d 乳剤の場合は、葉鞘内に薬液がきちんと浸透するように丁寧に散布する。粉剤の場合は、茎と葉元の間には散布し降雨や散水等により溶解させ、葉鞘内部へ浸透させることで防除効果が高まる。
- e 培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。
- f 平成24年度病害虫発生予察技術情報第3号参照(平成24年6月11日付)。

○ イネヨトウの防除対策

- a 11月中旬の調査の結果、新植夏植ほ場における芯枯茎率は1.2%（前年0.8%、平年1.9%）と平年並であった。
- b 11月のイネヨトウ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は0.4頭（前年0.1頭）であった。



<防除上注意すべき事項>

- a カンシャシンクイハマキの防除上注意すべき事項を参照。
- b 平成26年度病害虫発生予報第6号（平成26年8月28日付）コラム参照。

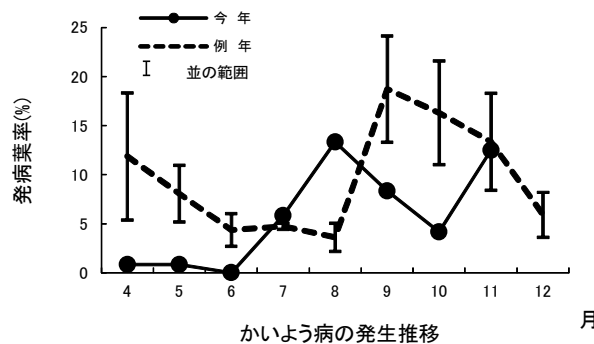
## 2 シークワーサー

(1) かいよう病

発生程度 : 並

予報の根拠

11月下旬の調査の結果、発病葉率は12.5%（前年6.7%、例年13.3%）と例年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- a 罹病した枝葉及び果実は、伝染源となるので除去する。
- b 秋芽のミカンハモグリガの穿孔から病原菌が侵入しやすいので、同虫の防除を徹底する。

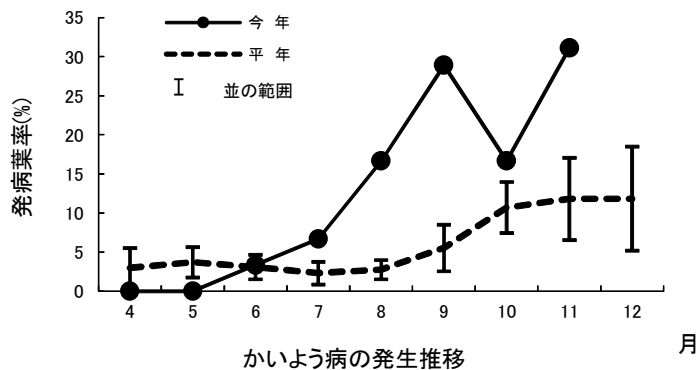
### 3 タンカン

(1) かいよう病

発生程度 : 多

予報の根拠

11月下旬の調査の結果、発病葉率は31.1%（前年2.2%、平年11.8%）と平年より高かった。



<防除上注意すべき事項>

- a 罹病した枝葉及び果実は、伝染源となるので除去する。
- b 秋芽のミカンハモグリガの穿孔から病原菌が侵入しやすいので、同虫の防除を徹底する。

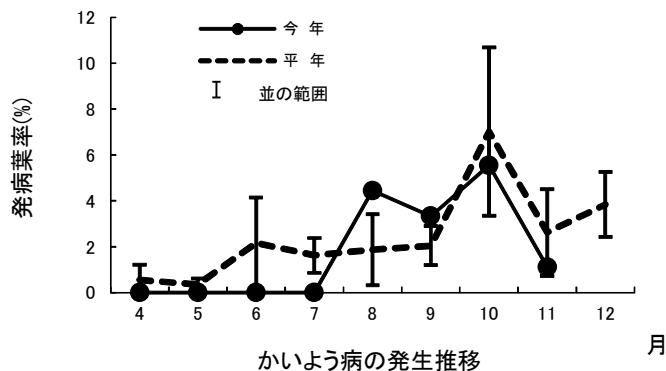
### 4 温州みかん

(1) かいよう病

発生程度 : 並

予報の根拠

11月下旬の調査の結果、発病葉率は1.1%（前年0%、平年2.6%）と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- a 罹病した枝葉及び果実は、伝染源となるので除去する。
- b 秋芽のミカンハモグリガの穿孔から病原菌が侵入しやすいので、同虫の防除を徹底する。

### 5 キャベツ

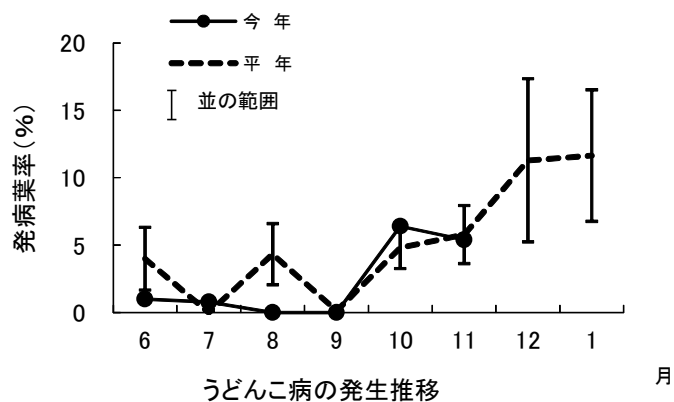
○ ハスモンヨトウの防除対策

- a 11月下旬の調査の結果、株当たり幼虫・蛹数は1.0頭（前年0頭、平年0.3頭）と平年より多かったが一部ほ場で多発した。
- b ほ場周辺の雑草は本種の発生源となるので除去する。
- c 主に葉裏に産卵するので、薬剤は葉裏にも十分かかるよう散布する。
- d 中齢以降の幼虫は薬剤の効果が高いことから、幼虫が若齢期の段階で防除を徹底する。

## 6 きゅうり(施設)

- (1) うどんこ病  
 発生程度 : 並  
 予報の根拠

11月下旬の調査結果、発病葉率は5.4%(前年2.2%、平年5.8%)と平年並であった。

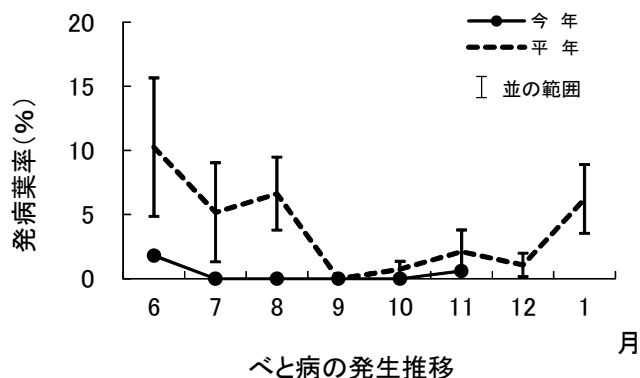


<防除上注意すべき事項>

老葉や病葉は発生源となるので、ビニール袋に入れるなどして施設外に持ち出し処分し、透光通風を良くする。

- (2) べと病  
 発生程度 : 並  
 予報の根拠

11月下旬の調査結果、発病葉率は0.6%(前年0%、平年2.1%)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

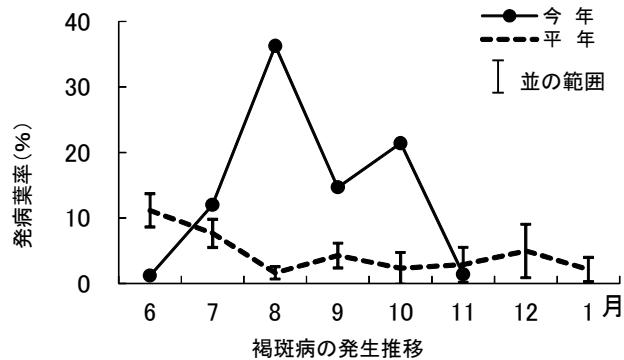
- 密植や過繁茂を避け、透光・通風をよくする。
- 被害葉は施設内から持ち出し処分する。
- 多発すると防除が困難になるので、早期発見・早期防除に努める。

(3) 褐斑病

発生程度 : 並

予報の根拠

11月下旬の調査結果、発病葉率は1.4%(前年0%、平年2.8%)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

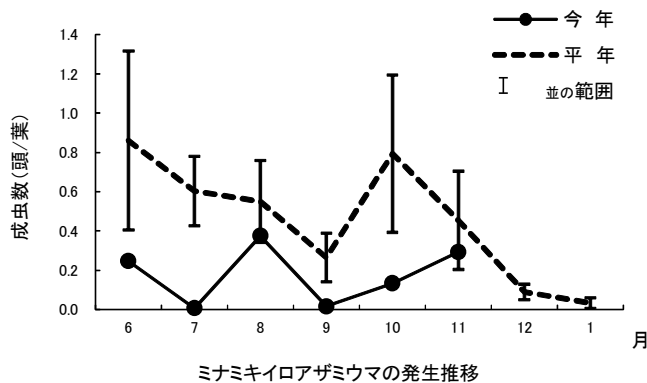
- a 多湿にならないよう、施設内の換気に注意する。
- b 下葉の老葉を早めに除去し、施設外に持ち出し処分する。
- c 薬剤耐性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

(4) ミナミキイロアザミウマ

発生程度 : 並

予報の根拠

11月下旬の調査結果、葉当たり成虫数は0.29頭(前年0.09頭、平年0.45頭)と平年並であった。



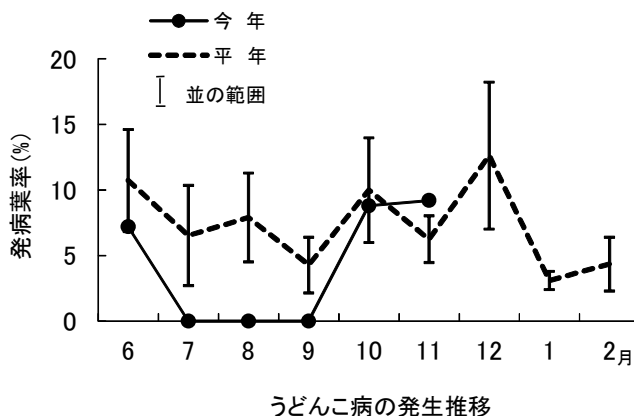
<防除上注意すべき事項>

- a 本種は灰白色斑紋病や黄化えそ病の媒介虫である。
- b 施設周辺の雑草は本種の発生源となるので、除草を行う。
- c 施設開口部には目合いの細かい防虫ネットを展張し、本種の侵入を防止する。
- d 摘心や摘葉後の残渣は、本種の発生源となるので、ビニール袋に入れるなどして密閉し、施設外に持ち出し処分する。
- e 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

## 7 にながうり(施設)

- (1) うどんこ病  
 発生程度 : 並  
 予報の根拠

11月下旬の調査結果、発病葉率は9.2%(前年0%、平年6.3%)と平年よりやや高かった。

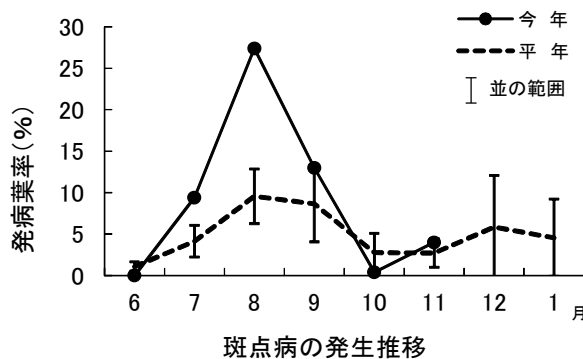


<防除上注意すべき事項>

- 発生源となる不要な老葉・下葉を除去し、透光通風をよくする。
- 除去した葉はほ場内に放置せず、ビニール袋等に入れるなどして持ち出し処分する。
- 薬剤防除は予防散布に重点をおく。

- (2) 斑点病  
 発生程度 : 並  
 予報の根拠

11月下旬の調査結果、発病葉率は4%(前年0%、平年2.7%)と平年並であった。



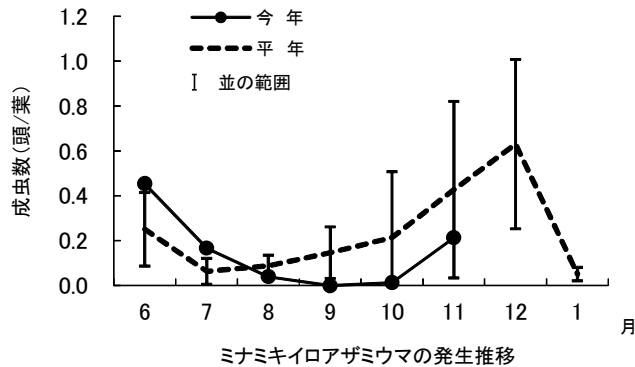
<防除上注意すべき事項>

- 老葉や病葉は発生源になるので除去し、ほ場外に持ち出して処分する。
- 多湿にならないよう、施設内の換気に注意する。
- 中～下位葉をよく観察し、早期発見・早期防除に努める。

(3) ミナミキイロアザミウマ

発生程度：並  
予報の根拠

11月下旬の調査結果、葉当たり成虫数は0.21頭(前年0.1頭、平年0.42頭)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

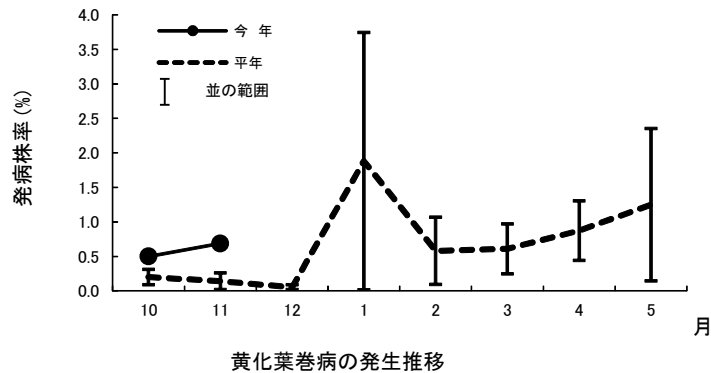
- 施設周辺の雑草は本種の発生源となるので、除去する。
- 施設の出入口、天窗、側窓にはネット資材等を張り成虫の侵入を防ぐ。
- 摘心や摘葉後の残さは、本種の発生源となるので、ビニール袋に入れるなどして密封し、施設外に持ち出し処分する。

## 8 トマト

(1) トマト黄化葉巻病

発生程度：やや多  
予報の根拠

11月下旬の調査の結果、発病株率は0.7%(前年0.6%、例年0.1%)と例年より高かったが、一部の施設で多発した。



<防除上注意すべき事項>

- 発病株は感染源となるため、早急に抜き取る。抜き取った株は必ずビニール袋に入れるなどして密封し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 施設内外の野良生エトマトは、本病の感染源および媒介虫であるタバコナジラミの発生源となるので、抜き取り密封処分する。
- 黄色粘着テープ等により、タバコナジラミの早期発見・早期防除に努める。
- タバコナジラミの薬剤防除を行う場合は、マルハナバチに影響の少ない薬剤を選定する。

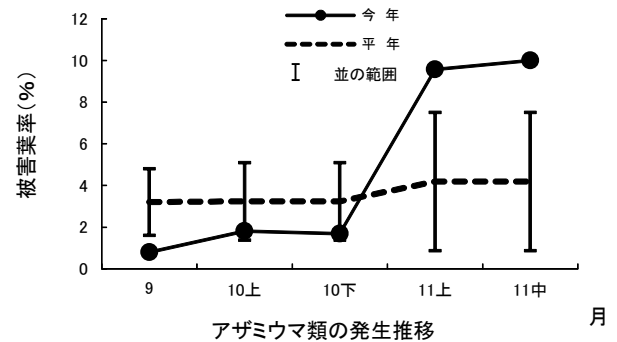
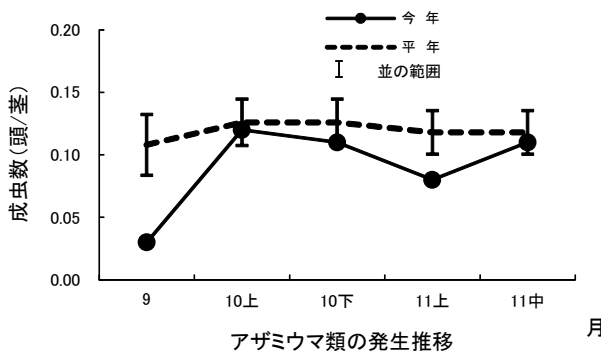
## 9 小ぎく(年末出荷用)

### (1) アザミウマ類

発生程度：並

予報の根拠

- a 11月の調査の結果、茎当たり成虫数は上旬0.08頭、中旬0.11頭(前年0.16頭、平年0.12頭)と上旬は平年よりやや少なく、中旬は平年並であった。
- b 被害葉率は上旬9.6%、中旬10.0%(前年21.6%、平年4.2%)と上、中旬とも平年よりやや高かった。一部ほ場で多発生が見られた。



<防除上注意すべき事項>

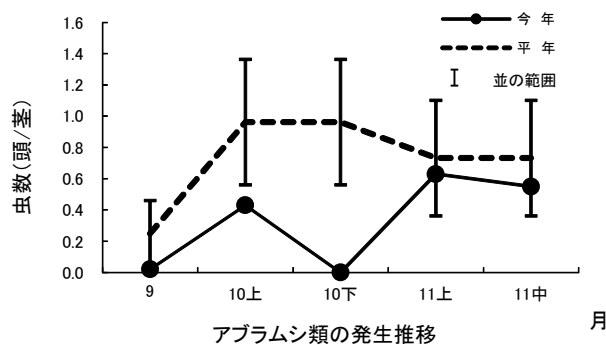
- a 成虫は新葉や上位葉に、幼虫は上～中位葉の葉裏に多いことに留意しながら、丁寧に薬剤散布を行う。
- b 同一ほ場内にあるキクは、異なる品種、異なる成長段階であっても、同時に防除を行う。
- c 地際部から新しく出てきた脇芽は、アザミウマが増殖しやすいので、早めに除去する。
- d ほ場内外の雑草や収穫終了ほ場の残渣は発生源となるので、早めに除去する。

### (2) アブラムシ類

発生程度：並

予報の根拠

11月の調査の結果、茎当たり虫数は上旬0.6頭、中旬0.6頭(前年1.8頭、平年0.6頭)と上、下旬とも平年並であった。



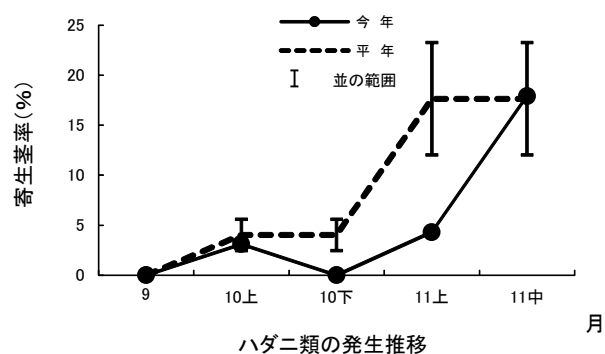
<防除上注意すべき事項>

- a ほ場周辺の雑草はアブラムシ類の発生源になるので除草を行う。
- b シルバーポリテープを畦上に張り出すか吊したり等して有翅虫の飛来侵入を防ぐ。
- c 早期発見・早期防除に努める。



(3) ハダニ類  
 発生程度 : 並  
 予報の根拠

11月の調査の結果、寄生茎率は上旬4.3%、中旬17.9%(前年9.4%、平年17.6%)と上旬は平年より少なく、中旬は平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- a ハダニ類は乾燥条件下で発生しやすい。
- b 本県で発生の確認されている種はナミハダニ黄緑型である。
- c 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。